



野溝眞次の住まいは、下谷御徒町、三枚橋の御徒士組屋敷にありました。父、野溝良之助は御徒士二十番の組頭です。

御徒士というのは歩兵です。御徒士の子は御徒士になるときまっています。

ところが世の中が変って来ました。時は文化文政（一八〇四―一八二〇）、戦争はなくなり、世の中泰平で、どうもお徒士という役目そのものも、將軍が出かける時の護衛か、お城の出入口の門番くらいしかありませんでした。でも、まじめにつとめていれば、認められて進級することだってありました。

しかし、それだって、長男は父の仕事をそのまま継ぐのでいいのですが、次男、三男となると、身の振り方から心配しなくてはなりません。下手をすると、兄の厄介者として終る者さえいました。

医者になりたいという者もいました。絵が習いたい、文章を書いて、物語作家になりたい……、もう少しくだけて義大夫、都々逸といった音曲をやりたいがる若者も出て来ました。野溝眞次も自分は何をするべきか、迷う少年のひとりでした。

じつは組屋敷の仲間を誘われて、近くの本草学（植物学、本来は薬草研究）の先生、奥野正太郎の所に出入りしていました。